

---

**魔法戦記リリカルなのはmemories ~ 幼馴染と聖王の末裔 ~**

竹馬プシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはmemories 〈幼馴染と聖王の末裔〉

### 【Nコード】

N2720P

### 【作者名】

竹馬プシー

### 【あらすじ】

J・S事件から八年後、高町なのははある青年に会った。その青年はなのはに関わりがある人物だった。

だがなのはにはその記憶が消されていた。

消されていた記憶とは、なのはと青年の思い出であった。

二人が会ったことにより物語は始まり、そしてその二人によって管理局の歴史を大きく変える事件が起こる事になる。

それは、管理局の実態を知ったなのはと、親の復讐のために動いて

いた青年の二人が望んだことであつた。

魔法戦記リリカルなのは memo  
ries 幼馴染と聖王の末裔。 始まります。

**報告 設定変更も載せていますので絶対に見てください！！**

**（8月1日 追加**

三ヶ月ぶりです。

三ヶ月も更新を停止してしまつてすみません。

一応活動報告の方で言っていたのですが、理由はプロットを忘れてしまったという事をしでかしたからです。

本当にすみませんでした。

それでやっとプロットが決まったところです。

まあぶっちゃけると、もう一つのリリなの二次創作のプロットを諦めてそのプロットをこっちに使うとした事でプロットが出来たのですけどねww

その代わりですが、当初短めで終わる予定だったのですが、それより長くなりそうです。

当初のプロットも少しは思い出しているんですけど、その時のプロットと結構変わっているからな……

アンチ管理局だし、なのはが途中から魔改造兼チート化するなどという感じですね……

前回のプロットと変わっていないのってオリキャラぐらいじゃね？

ちなみにオリキャラですが、別にチートという事でもないかも。別

に魔力量は原作のなのはよりは下ですし、ただ戦闘能力が高いだけと言っくらいですかね。

まあ、その話はこれくらいにして設定変更についての話をします。

まずタイトルですが、『魔法少女リリカルなのは memories』から『魔法戦記リリカルなのは memories』(幼馴染と聖王の末裔)に変更。

何故魔法少女から魔法戦記に変えたのかと言うのは、J・S事件から二年後ではなくて八年後、要するにForceから二年後に変更するからです。

そうするといろいろと修正をしないといけなくなりますので、それを7月の上旬までに終わらせたいなと思っています。

何故それほど長いのかと言うのは、今電撃文庫に応募するための小説を中心に書いているためです。なので修正もそれほど出来ないと思いますので

一応タイトルとあらすじは今さっき変えておきましたので。後小説内の内容も一部だけ修正していますので。

後、7月中に一話は書きたいと思っています。かけなかったらすみません。

それでは。

## 8月1日追記

一日過ぎちゃいましたね…… すみませんでした。

修正は終了し、執筆も先に進んでおりますので、日付が変わる2日の0時から投稿再開します。

自分の中ではかなり先までプロットが出来ているのでかなりできているので書くころと思えばいつでも書けますね。まあ、他の小説も書かないといけないので毎日は無理だと思いますが。

## プロローグ（前書き）

竹馬プシーです。

リリなの二次創作を書くのは初めてです。

口調などで変なところがあれば俺に伝えてください。  
それではどうぞ。

## プロローグ

「大きくなったらどうするの?」

どこにもある公園で一人の少女と一人の少年が遊びながら話していた。

二人は六歳くらい歳の年齢で小さな頃から家が近所ということよく二人で遊んでいた。

そんな二人がある時に話した会話である。「大きくなったら?」

「そう、大きくなったら」

少年は少女にそう言った。

別に他意はなく、ただ純粹に聞いたのだ。少しも間を空けず、少女はすぐに答えた。

「大きくなったら            のお嫁さんになりたいなの」

「僕のお嫁さんになりたいの?」

「うん」

少女は即座に綺麗な笑顔でそう答えた。

他意も何もなく純粹に少女は答えたのだ。「分かった。大人になったら結婚しよ」

「うん」

少年は少女の答えに了承し、約束した。

これはある二人の過去の会話。

二人の約束は叶わなかった。

いや、叶う訳がなかった。

なぜなら少年の家族は魔導師だったからだ。

少年の家族は七年前まで自分達の次元空間航行艦船に住んであらゆる管理世界を行き来し、スクライヤの一族と同じく遺跡発掘をし



ていた。

だが七年前、つまり二人が生まれる一年前、少年の両親にあたる夫婦はいつも通り遺跡を発掘するために、いつもは他にもたくさん居るのだが、今回は二人だけで次元空間航行艦船で次元空間を移動していた。

しかし、その移動中に異変が起こったのだ。

それは突然の出来事だった。

二人が乗っていた次元空間航行艦船が、その時に運んでいたロストログアが発動したことによってエンジンを破壊したのだ。

すぐに対応して近くの世界に緊急着陸しようとしたのだ。

それが第97管理外世界、その世界で言う地球だった。

だが着陸する所がなく、近くにあった海に着陸するしかなかった。

しかも海なら目立つことはなく、騒がれる事はなかったので都合が良かった。

そして海に着陸したのは良かったが、ロストログアによる破壊が酷く、沈没し始めた。船に積んでいたロストログアと一緒に。

すぐに非常用で脱出したが、その脱出した直後に次元空間航行艦船は沈没した。

これで完全に帰れなくなった。二人は別の世界に行く魔法は使えなかった。誰かが迎えに来るまで帰れなかった。

そうなるとこの第97管理外世界に住むことになる。

しかしお金はこの世界とは別の通貨なので使えるわけもないので無一文であった。

とりあえず、近くの陸に上がり何か方法が無いかと考えてた。

数時間歩いても結局何も思い付かず、ただ歩き疲れてた。しかも妻は妊婦だった。

流石にこれ以上は歩くのは負担をかけることになる。そういうこともあって少し近くの公園のベンチで休んでいたのだ。

そこで休んで居ると、夫婦らしき人達が歩いて来ていた。

いや、こちらに近づいて来ていた。

座っていた二人は自分達に何か用なのかと思っていた。だが近づいてきた理由は意外な事だった。

「あの、お腹の子は何ヶ月なんですか？」

そう、近づいてきた二人はお腹の子の事を聞いてきたのだ。

良く見ると近づいてきた女性の方もお腹が膨れており、妊婦だと言ふ事がすぐに分かった。

同じ妊婦だから近づいてきたのだ。お互いの子供を授かっている身として。

そうと分かると座っていた彼女は微笑み、何ヶ月なのか答えた。

そうやって話が進んで行き、自分達が無一文だと言ふ事を話した。

もちろん、魔導師や別の世界からやってきた事は隠して事情を話した。ってというか話していた。

それを聞いた二人は二人で話し始めて何かが決まると、

「良かったら私の家に来て暮らしませんか？」

と言ってきたのだ。

さすがに驚いた。身元も知らない自分達を住まわせてくれると言うのは。

どうしてそんな事をしてくれるのかと聞くと、

「さすがにこのまま野宿させるのはどうかと思つし、さらには妊婦でしょ。子どもが可哀想だから」

と返ってきた。

それを聞いて断ろうとしたが、お腹の中の子もあるという事で諦めて居候してもらふ事になった。

だがさすがにただ居候しているのはどうかと思つて自営業をしていたので手伝ったりしてお金を貰っていた。

こうして年が過ぎて一年後にはお互いに子どもが産まれた。

それが冒頭にでた少女と少年である。

そしてさらに時が経ち、冒頭の少女と少年の話に戻る。

こんな事があつたからこそ、二人の約束は叶う事が無かつたのだ。そう、七年もこの地球に暮らしていたがずっとは居られなかつたのだ。

いつかはこの地球から出て行かなければならない。少年の両親はそう思つて居たのだ。

だが、その策は無かつた。なぜなら少年の両親は事故で死んでいた事になつていたので。

だから七年も経つてしまった。誰もここには来る人は居ないのだから。

しかしその一年後、奇跡が起こつた。

船と一緒に沈んだロストロギアを回収しようと少年の一族がやってきたのだ。

それを知つた少年の両親はやつと帰れるのだと思つた。

だが、それは突然の事だったので両親は少年にも自分達が魔導師だとは言つていたが、ずっとこの地球に居ると少年は思つていたので。だからあの約束をしてしまった。しかし、それが叶わないと知つた時は泣いていた。

少女と一緒に居られない。それは少女との約束を守れないという事だからだ。

だが少年の母親はこう言つた。

「多分、あの子とはまた会ふと思つて。あの子にも魔力が備わつているのが分かつているから」

そう。これは母親の嘘という訳ではなく本当の話だつた。

少女には魔力が備わつている事を少年の母親は知つていた。しかも、相当の魔力を持っていると言つた事。

だからまた少年とはまた会つたろうと言つたのだ。

しかし、それでもやらなければならぬ事があつた。

少女とその両親、そして近所の人たちの記憶を消さなければならなかつたのだ。

本当なら消さなくても良いかも知れない。けど、そうしなければな

らなかった。

なぜなら少年の家族は元々この世界の住民ではない。念のために記憶を消した方が良かったのだ。

それを少年の両親は少年に話した。だが少年は何も言わなかった。記憶を忘れてもまた少女に会えるなら良いと思ったのだ。また会えるかも知れないだけでも嬉しかったからだ。

そして、少年の家族が帰るときがやってきた。

誰も迎えに来る人は居ない。当たり前だった。昨日、少年の家族の記憶を魔法で消したからだ。

なので少女は少年との約束を覚えていない。記憶を忘れてしまったからだ。

そして、だれも迎えに来ないまま少年の家族は第97管理外世界、地球を後にした。

それからちょうど二十年後、少女はあの時とは変わり今では「エースオブエース」と言われる存在になっていた。

しかし二十年前の少年の記憶は覚えていない。少年の事なんて忘れていた。

だが、少女と少年は再会を果たす。

そして二人が再会を果たす時、二人の記憶は動き出し物語始まる。

魔法戦記リリカルなのは memories 幼馴染と聖王の末裔。 はじまります。

## プロローグ（後書き）

ちなみに言っておきますが、今回の重要人物である少年ですが第一章ではそれほど出てきません。

第一章はなのはが少年に再会するまでの内容なので第一章の最後に出てくるくらいです。

とりま、意見、感想お待ちしております。

## 第一話（前書き）

言い忘れていましたが、これは不定期です。

## 第一話

「今日はここまで。みんな、お疲れ様」

ジェイル・スカリエツィ事件から八年後、高町なのはは機動六課は解散した後、戦技教導官として教えていた。

あれからというもの、養子として迎え入れた高町ヴィヴィオを親友でヴィヴィオの後見人であるフェイト・T・ハラウンと一緒に育てている。

もちろん育児と仕事を両立していた。

そして、今さっき模擬戦が終わって生徒達は『ありがとうございしました!』と言っていた。

なのははそれを聞いてから生徒達を解散させ、自分もヴィヴィオがそろそろ帰ってくる頃なので家に帰る事にした。

帰ろうとしてたら、誰かが待っていた。

「やっと終わったのね」

「フェイトちゃん!? なんでここに?」

何故かフェイトが待っていたのだ。

いつも通り帰ろうとしていたのにフェイトがここに居る事になのは驚いていた。

「ちょっと近くまで来たから一緒に帰ろうと思ったのよ。なんか悪かった?」

なのはの驚きにフェイトは自分が居てはまずかったのかと落ち込んでしまった。

それを見たなのはは慌ててしまい、とりあえずそういう事ではないと言おうとした。

「そんな事はないよ! ただフェイトちゃんがここに居るのに驚いただけで……」

それを見ていたフェイトは慌てているのはを見て笑い始めた。

「え、え、どっという事なの?」

突然笑い出したフェイトを見てなのはは訳が分からなくなっていた。

そして訳が分かっているのではないのを見てフェイトは答える事にした。「だ、だって、なのはの慌てている顔を見て面白かったんだもん」

フェイトは笑いながらもなのはにそう答えた。それを聞いたなのはは落ち込んだ所から全て芝居だと分かり、少し怒った。

「フェイトちゃん、からかわないで欲しいなの」

「ごめんごめん、なのはの反応が見たかっただけだから」

「そ、そんな事より速く帰ろうなの！早くしないとヴィヴィオも帰ってきちゃうから！」

なのははすこし恥ずかしくなっていて顔を赤くしながらも、今この空気がから逃げたくてしようがなかった。

フェイトもそんななのはをみて微笑んでいたが、なのはに従って自分の車になのはを乗せて家に帰る事にした。

それから約30分後、なのはを乗せたフェイトの車はヴィヴィオが待っている家に着いた。

すぐに車を降りて二人は家の中に入っていった。

「ただいま」

玄関を開けて帰ってきたことを伝えると、玄関に向かって駆け走ってくる子どもがいた。

彼女は金髪で右目が翡翠、左目が紅玉のオッドアイをしていた。

ヴィヴィオである。

ヴィヴィオは二人が帰ってきた声を聞いて、すぐに駆けつけたのだ。そしてヴィヴィオはなのはに抱きついた。

「なのはママ、フェイトママおかえり」

ヴィヴィオは笑顔でそう言った。

隣でフェイトがヴィヴィオが先になのはに抱きついたのに少し膨れていたが、ちゃんとフェイトにも抱きついたので普通の顔に戻って



いた。

そんな三人は家の奥に行つてリビングに向かった。

フェイトとヴィヴィオはスファアに座つたが、なのはは座らずに居た。

「私はお風呂に入ってくるからその後夕食にしよう」

「じゃあ私も一緒に……」

なのはが風呂に入ると言つたのでフェイトもすぐに立ち上がつて一緒に入ろうと言つた。

だがなのははフェイトの言葉を遮つて話した。

「だめ、フェイトちゃんもヴィヴィオの面倒を見ていて。少し、一人になりたいから」

「また？最近一人になりたがるけどどうしたの？」

フェイトは心配をするかのうようになのはに言つた。

そう、またなのだ。なのはは最近何かを考え事をしている。

別に仕事に支障は起こすようば事は聞いていないのでそれほど心配する事ではないのかもしれないとフェイトは思った。

だがそれでもフェイトはそんなのはを見ていてどうして自分達に教えてくれないのかと思つていた。

またヴィヴィオもなのはが最近何かを考え事をしているのに気づき始めていた。

せめて自分達に打ち明けてくれれば良いのにとフェイトは思つていた。

そんな事を思つていると、なのははもうお風呂場に向かつていた。

そして数分してなのはが戻つてくると今までどおりのなのはに戻つていた。

いや、そうではなかった。

フェイトには今までどおりのなのはには見えていなかった。

はたからみれば何も抱え込んでるように見えないがフェイトにはそう見えたのだ。

長年の付き合いなのでなのはがいつも通りに戻っているように見え

ていても分かっちゃしまうのだ。

それになのは未だに自分の中に抱えんじまう事がある。

そう思ったフェイトはどうやってその話を切り出そうか考え始めた。だが、言おうと思ってもなかなか言えず結局夕食を食べ終わっても言えず、寝る前まで言えなかった。

そして三人で寝ようとして、ヴィヴィオが寝たのを確認したらフェイトは意を決して言う事にした。

「ねえなのは、何か考え事をしているでしょ？」

「え、何も考え事なんかしてないよ」

なのはは違和感などを感じない言い方で返した。

だがフェイトはそれが嘘なのは分かっていた。

「嘘付かないで言っつてよ。なのはが何か考え事をしているのは分かっているのだから」

「だからなにも考え事なんてしてないよ」

フェイトはその後も幾度もそんな事を言っつたがなのはは挫けずに同じような事を返した。

さすがに諦めたフェイトは最後にこう言っつた。

「じゃあ、今言わなくても良いから今度話してね」

フェイトはそう言っつたのはは黙っつてしまっつた。

フェイトはそのまま寝てしまっつたがなのははフェイトが寝たのを確認すると小さく呟いた。

「ごめんね。でも私でも分からないの。言えるようになったら言っつから」

なのははそう呟いた後、フェイト同様に寝る事にした。

## 第一話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

## 第二話

「はっ……また、あの夢なの？」

夜、なのはは眠れないでいた。ある夢を見てしまい、まったく眠れないでいたのだ。

なのはが考えている事は夢のことなのだ。別に怖い夢を見ているわけではない。なのはにとって気になってしまう夢なのだ。

一体どんな夢なのかというと、小さい時のなのはと見覚えの無いある少年が出てくる夢を見るのだ。

それも最近、同じような夢を見る。毎日のように。

それが気になって仕方が無かった。夢に出てくる少年の事が。

そしてその夢を見ると何故か懐かしいと感じた。覚えも無い夢なのに。

どんなに思い出そうと思ったとしても何も思い出せない。そんな日々が毎日続いていた。あの夢は一体何なのか？どうして、そんな夢を見るのかと。そしてこのもやもや感は何なのかと。

しかも忘れようと思ったとしても、どうやったとしても忘れる事が出来ないでいた。

本当にあの夢は何なのかと、なのははそう思っていた。

「……とりあえず寝よう。あの夢が何なのかは分からないけど」

なのははそれ以上は考えるのをやめて、また寝る事にした。

しかしまたしても同じ夢を見てその度に起きてしまい、ほとんど寝れずじまいで朝になってしまった。

午前6時30分、空は少し日が昇り始めてきた時にフェイトは目を覚ました。

目が覚めて横を見ると、なのはの姿が無かった。

多分リビングに居るのだろうとリビングに向かうと、案の定なのはは居て朝食を作っていた。

「なのは、起きていたんだ」

「あ、フェイトちゃんおはよう」

フェイトの声が聞こえたので、なのはは降る向いた。

しかしなのはは夜に眠れなかった事を気づかれないうちにしていた。誰にも心配をかけたくなかったのだ。しかも夢の事で悩んでいるなんて。

「なのは大丈夫？なんか、いつもと変じゃない？」

けどフェイトはなのはの異変に気づいていた。長年の付き合いなのですぐに分かったのだ。

「何言っているのフェイトちゃん。私はいつもと同じなの」

しかしなのははそれを否定した。たとえ気づかれていようと、心配をかけたくは無かったのだ。

フェイトもそれ以上は言わなかった。言ったとしてもなのはのことだから、否定してくるに決まっていたからだ。なのでこれだけは言っておく事にした。

「分かった。けど、一人で抱え込まないでね」

「分かったなの。それじゃ、フェイトちゃんも手伝ってね」

そんな話はこれで終わりにして、フェイトは朝食の準備を手伝った。

二人で朝食の準備をしているとやはり時間が短縮でき、あつという間に準備が終わった。

「それじゃ、私はヴィヴィオを起こしに行つて来るね」

準備が終わると、なのははヴィヴィオを起こしに行った。

フェイトは二人が降りてくるのを待っていようとしていると、突如音がした。音は廊下側から聞こえてきた。

何の音かと確認しに廊下に出て行くとなのはが廊下で倒れていた。

「なのは！！」

すぐになのはの所に駆けつけた。突然の余り、フェイトは少し動揺していた。

フェイトの声が大きかったのか、ヴィヴィオが寢室から出てきた。

「ん、フェイトママどうしたの？」

ヴィヴィオは起きたばかりなのか、なのはが倒れている事に気づいていなかった。

しかしフェイトが焦っている事には気づいていた。なので何でそんなに焦っているのだろうかと思った。

「ヴィヴィオ！急いで救急車を呼んで！！なのはが倒れたから！！」

「！？わ、分かった！」

フェイトの言葉にヴィヴィオはやっと目が覚めて、なのはが倒れている事に気づいた。

そしてすぐに電話を取りに行き、救急車を呼んだ。

ヴィヴィオは電話を切るとすぐにフェイトの所に戻った。

そして待つこと数分後、救急車は家に到着し、なのはを連れて病院に向かった。

## 第二話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

### 第三話

「ただの貧血ね。多分寝不足だと思っわよ」

医者、っていうよりシャルがフェイトとヴィヴィオにそう言った。それを聞いた二人はただの貧血だけだったのでホッとしていた。けどフェイトはもう一つ気になっている事があった。

何故シャルがここに居るのか？機動六課が解散された後、シャルは元の職場である時空管理局本局の医療局に戻ったはずである。なのに何故普通の総合病院に居るのかと。

「後、私が何故ここに居るのかと思っていそうだけど、ちょっとこの病院に用があったの。そうしたら、いきなりなのはちゃんが搬送されてきたから驚いちゃったわ」

そんな事を思っている二人に気づいたのか、シャルは二人の疑問に答えた。

それを聞いてフェイトは納得した。偶然シャルはここに用事があった、そこになのはが搬送されたのであっただけなのだ。

「まあなのはちゃんに何かあったというなら私はすぐに駆けつけるけどね。なのはちゃんはあの時みたいにもたムリをするような気がするから。」

フェイトはそれを聞いてなんとなく分かった。

J.S事件の後、傷ついたなのはにシャルが主治医についていたのではのがムリをする可能性がある事を知っていたからだ。

「さて、」とシャルは立ち上がり、「じゃあ、なのはちゃんの所に行こうか」とフェイトとヴィヴィオに言った。

フェイトとヴィヴィオはシャルについて行き、なのはの病室に向かった。

エレベーターで上の階に上がり、止まると三人はエレベータを出る。そして数分歩いてなのはの病室に着き、病室の扉を開けた。病室は個室であり、ベッドにはなのはが寝ていた。



そんななのはをみて安堵していたフェイトだったが、疑問に思っていた事が一つあった。シャルルが言うにはなのはは寝不足だったのだろう。けどなのははほとんどフェイトとヴィヴィオと一緒に寝ていたはず。寝不足になるような事は一つもなかった。なのにどうして寝不足になっていたのか。

それと最近、なのはが何かを考えている事に気づいている。それが原因で、なのはは毎日全然眠れていないのではないかとフェイトはそう思った。

けどフェイトは今の段階でなのはに何かをするようなことは無かった。なのはが話してくれない限り、フェイトができる事なんて無かったのだ。それがフェイトにとって悔しかった。友達のために何も出来ない自分がとてつもなく。

「ん、あれここは？」

フェイトがそう思っているとなのはが目を見ました。

「「なのは(ママ)!!」」

なのはが目を見ますと、フェイトとヴィヴィオはなのはに近づいた。

ここがどこなのかとなのはは戸惑っていたがすぐにフェイトとヴィオの声が聞こえたので、別に怪しい所では無いと分かる。

そして辺りを見渡し、ここがどこなのかに気づく。シャルルも居るといふこともあってすぐに病院だと分かった。

「私、どうしちゃったの？」

けどなのははどうして病院に居るのか分かってなく、どうして自分が寝ていたのかと思う。どうやら自分が倒れた事に気づいていないようだ。

なのはが倒れた事をフェイトが話した。ヴィヴィオを起こしに行こうとしているときに倒れたという事を。

それを聞いてなのはは倒れた時の事を思い出す。自分がヴィヴィオを起こしに行こうとしている時に、突如眩暈がして何も見えなくなっただけのこと。

「そっか、あの時私は倒れちゃったんだ……」

「なのはママ、大丈夫なの？」

「大丈夫だよヴィヴィオ。久々にぐっすり眠れたから」

ヴィヴィオはそれを聞いて安堵した。起きて早々、なのはが倒れていたのでフェイトより心配をしていたのだ。

またなのははさっきの言葉に寝不足だった事を認めていた。自分が寝不足で倒れたのだろうと何となく分かっており、フェイトとヴィオはシャルマルに聞いているだろうと思ったからだ。

「なのは、一体何を悩み考えているの？寝不足になるということはちゃんと眠れていないんでしょ？」

そしてフェイトは今まではが黙っている事を聞こうとした。

一体、なのはは何で悩んでいるのか。それが寝不足を真似ている事くらいはすぐに分かっていた。

なのはは一度、考えるような顔をしていた。そしてこれ以上は隠し切れないだろうと思った。貧血で倒れてしまったのだから、フェイトが心配をするのは当たり前前だと思ったからだ。

「分かった、ちゃんと話すよ。けど私にもよく分からないの」

「なのはでも分からない事？」

「うん」つとなのはは言った。実際、なのはにも分からないのだ。あの夢はなんなのか？夢に出てくる少年は誰なのかなどと、分からない事が多いのだ。

それでもなのはは夢に出てくる内容を一つ漏らさずフェイトに話した。それを聞いたフェイトは考え始めた。

「その夢に出てくる少年は、なのはは知らないのだよね？」

フェイトは確認をする為なのはに聞いた。なのはは「うん」と小さく言い、頷いた。

「うん……、私も分からないな。シャルマルは何か分かりそう？こういう事ならシャルマルに聞いたほうが良さそうだから」

フェイトは考えても訳が分からなかった。けどシャルマルなら分かるかも知れないと思ったのだ。

「私も分からないわね。確かに夢に関する事なら私に聞いたほうが分かるかも知れないと思うけど、今回についてはよく分からないわね」

「けどやはりシャルでも分からなかった。しかしシャルは「けど、」と言い、こう続けた。

「ユーノ君なら分かるんじゃないかしら？魔法についてならユーノ君の方が詳しいし。精神系の魔法もあるとは聞くから、そっちの可能性もあるかもしれないわよ」

シャルに言われて、なのはとフェイトは納得した。確かにこれが魔法の事なら無限書庫の司書長をしているユーノ・スクライアの方が詳しいのには事実かも知れなかった。

「ならば今度、ユーノに聞いてみるかと二人は思った。

「さて、一応なのはちゃんは明日まで入院だからゆっくりしてなさい」

「あ、でも仕事の方が……」

「それは大丈夫よ。今日は休むと言ってあるから」  
「でも、」

「つとなのは何かを言おうとしたが、これ以上先の言葉は言えなかった。相変わらず、シャルには頭が上がらないでいたのだ。

それを見ていたフェイトは笑いだした。JS事件の後、なのはがシャルに頭が上がらないのは知っていたが、目の前で見ると面白くて笑いたくなっていたのだ。

「フェイトちゃん、笑わないで欲しいの！」つとなのはが顔を膨らましながらフェイトの方に向いていた。

二人の顔を見ていながら、シャルは病室を出ていった。

## 第三話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

## 第四話（前書き）

相変わらずのペースです。

## 第四話

なのははシャマルに言われて一日安静にしている、その翌日には退院する事が出来た。

しかしなのはの寝不足が治った訳ではない。あの夢を見る限り、なのはに安息に眠れる事が出来ない。それはシャマルやフェイトにもどうしようとできるような事ではなかった。

睡眠剤を出しておくというのもあったが、それは逆になのはを怖がらせてしまう事になってしまう。寝たくなんて無いとまで思ってしまったら最悪だ。なので睡眠剤はなのはに出さない事にした。

これと言った対策が無いのだ。けどなのはは昨日フェイトに「私は大丈夫だから」と告げていた。それは無理をすと言う意味ではなく、あの夢を見ようが自分で何とかかしてみせるという意味である。

どの道、これはフェイト達に何とか出来る様なものではないと分かっている、なのはは自分で何とかしてみせると思ったのだ。

そして今日、なのははどうしてあの夢を見るのかという原因を知る為に、フェイトと一緒にユーノが居る無限書庫に行こうとしていた。

「なのは、一応聞くけど大丈夫？」

フェイトは病院の外でなのはを待っていると、なのはがやって来て様態を確認した。

「本当は大丈夫だと言いたいのだけど、今日も余り眠れてないの」

なのははフェイトに原因を明かしている為、本当の事を言った。

もうフェイトには隠す必要も無いし、真実を言った方が逆に心配をかけてくる事は無かったからだ。

それを聞いたフェイトは「そう……」と言った。どう足掻いたとしても、あの夢は見てしまう。それはどうしようにも無い事だからであり、フェイトやなのは本人には何も出来ないのだから。

けどフェイトは少し心配にしていたのに気づき、なのははそれに気づいてフェイトに心配を余りかけないようにする事にした。

「大丈夫だよ。フェイトちゃんの車の中で少し眠らせてもらおうから。またあの夢を見てしまう事になるけど、寝ないよりはましだから」

「なら良いのだけど…」

「それじゃあ、そろそろ行こう。ユーノ君を待たせているから」

フェイトはなのはに言われて、フェイトの車に二人が乗った。そして車を発進させ、無限書庫がある方に向かった。

少し運転すると、なのはは隣で寝てしまった。やはり余り眠れていなかったようだ。

さらに運転すると、なのははうなされ始めていた。別に嫌な夢でも悪い夢でもないが、何度も同じ夢を見ると怖くて恐ろしく思ってしまうのだ。

そんななのはを見ていて、フェイトはなのはに何かしてやってあげたかったが、さすがに運転中なのでなのはの方に顔を向ける事しか出来なかった。

「なのは、もうちょっとだからね。ユーノに会えば原因が分かると思うから」

なのでフェイトは寝ているなのはにこういう事しか言えなかった。それからさらに時間が少し経ち、なのはは目を覚ました。

フェイトがチラツとなのはの様子を見ると、顔色が悪かった。そして、なのはが何かを呟いていた。

何を言っているのかと耳を澄ませると、「……もう、嫌だ。眠りたくない。誰か助けて」と聞こえてきた。

そこまで追い詰められていたのだ。もう、眠りたくは無いというほどに。

フェイトはこんななのはが助けを求めているのに、何も出来ない自分が悔しかった。また、毎日こんな夢を見ていたのに気づかなかつた自分がさらに悔しくして、ハンドルを握っている両手をさつきより握り締めていた。

そして、なのはは数分していつもの表情に戻っていた。けどそれは自分が周りに迷惑をかけないで我慢しているだけだった。フェイト

にばれたとしても、余り心配をかけたくなかったのだ。

それに気づいていたフェイトはなのはに話しかけた。

「なのは、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

それは嘘だ。とフェイトはすぐに思った。さっきの顔を見てしまつたら、嘘だつて誰でも分かつた。

もう自分に隠す必要は無いはずなのにどうして隠してしまうのかと思つてしまった。

「なのは、私には我慢をしなくて良いんじゃないの」

「やっぱり、ばれちゃつたか。私つてほんと駄目だよ。フェイトちゃんに私が見ている夢の事を知つていても隠そうとしちゃうの。今ではこんな私が許せないでいるの。打ち明ければ気が楽になるのにそれを隠そうとする私が！」

なのははそんな自分を許せないでいた。それはなのはが言った最後の言葉にこもっていた。

「なのは……」

それを聞いたフェイトはさらに悔しくなっていた。何も出来ない自分が。本当に何も出来ないのかと思うほどに。

そして何も出来ないのなら、早く原因を知るべきだと思った。早く知つて、それで何かができる可能性があつたからだ。

「なのは、少しスピードをあげるから」

「あ、うん。分かつたなの」

フェイトは少し車のスピードをあげて急いでユーノが居る無限書庫に向かう事にした。なのはを早く助けたい。それがフェイトを動かしていた。

そして数十分後、フェイトの車は無限書庫の入り口に着いた。

二人は降りて、無限書庫の中に入つていった。



## 第四話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

## 第五話

無限書庫の中に入ったなのはとフェイトはすぐにユーノを見つけ  
た。

ユーノは一冊の本を真剣に読んでいて、なのはとフェイトが来た事  
に気づいていなかった。

「フェイト!!」

けどアルフがなのはとフェイトが無限書庫に来た事に気づいて、  
すぐに二人に近寄った。ユーノもアルフの声によってなのはとフェ  
イトが来た事に気づいた。

「なのはとフェイト、いきなり無限書庫に来てどうしたんだ？」

ユーノは読んでいた本を閉じて、なのは達の方を向いた。確かに  
何も連絡が無いで二人が来たのに少し驚いていたのだ。

けどなのはの表情がいつも見ているなのはと少し違う事にユーノは  
気づいていた。何年もの付き合いなのですぐに分かったのだ。な  
のはに元気が無いということに。顔を笑顔にしていたがそれでも気づ  
いていた。

「それで、二人は僕に何のようなの？多分僕に用があつて来たんで  
しょ」

しかしユーノはそれには触れないことにして、二人からの言葉を  
待つことにした。多分なのはの事についてで、自分に聞きたい事がある  
のだからと察したのだ。

「ユーノには分かっていたんだね。うんそうだよ。ちょっとなのは  
の事で聞きたいことがあつて」

フェイトはユーノが自分に用があるという事に気づいているのだろう  
と思った。そして分かっているながらも、分からないように言ったの  
だろうともフェイトは思った。

「なのはに何かあつたの？」

ユーノはなのはに何かあつたのか聞いてみた。一体なのはに何が

あつたのだろうかと思つたのだ。

フェイトはなのはがこうなっている理由を話した。夢で同じような夢を見る事、小さい頃のなのはと少年の夢の事、そしてその少年をなのはは記憶に無いと言う事を全て話した。それを聞いたユーノは考え事をし始めた。しかも、いつもと違って相当真剣にだ。

「ユーノ、どうかしたの？」

それを見ていてフェイトはユーノがいつもより真剣に考えている事に気づいた。なのはもそれには気づいていた。これほど真剣に考えたユーノを見た事が無かつたのだ。そして数分してユーノは口を開いた。

「なのは、一つ聞いて良いかな？」

「あ、うん。別に良いけど……」

「それってなのはが何歳ごろに見えた？それとその頃の記憶って覚えてるかな？」

いきなりのユーノの質問に二人は訳が分からなかつた。どうしてそんな質問をするのか？ひよっとしたらユーノは何かを知っているのではないかと思つた。

なのはは訳が分からないままだったが、とりあえず答えることにした。

「たしか、6歳くらいだったよ。それとその頃の記憶は全然思い出せない。それもユーノ君に初めて会う前から思い出せなかつた。小さい時は余り気にしなかつたけど、今思うとどうしてなのかと思う。その言葉を聞いてユーノは確信を持つた。けどこれは偶然なのかと思つた。

「ユーノ、何か分かつたの？」

フェイトはユーノが何かを確信したような感じだったので聞いてみた。

「うん。しかも今僕が調べている事と関連しているというね。にしても何故今更なんだ？彼は何で今更こんな事を始めたのか。親の代わりに回収をしているのか？やはりそこが気になるな……」

「ユーノ、何を言っているの？」

フェイトはユーノが何を言っているのかまったく理解できなかった。けどこれで確信を持っているということが分かった。

「あ、ごめん、途中から独り言になってたね。多分なのはの見ている夢は、今僕が調べている事と関わっているんだ。ちょうど時期が重なっているんだ」

「ユーノ君が調べている事？」

「うん。このロストロギア何だけどね」

ユーノは先ほど読んでいた本を開いて二人に見せた。けどこのロストロギアが何の関連性があるのかと思った。

「これがどうしたの？」

「これは22年前、僕らと同じロストロギアを発掘する一族がこのロストロギアを運んでいたんだ。けどジュエルシードと同じで運んでいる途中で落としてしまったて、しかもジュエルシード同じで第97管理外世界にね。またそれを運んでいた一族の夫婦も第97管理外世界に落ちてしまったんだ。そしてその8年後に彼らと第97ロストロギアを回収しに次元空間航行艦船でやってきた彼らと同じ一族のおかげで帰還する事が出来た。そのときのなのは年齢は0歳から7歳の間。要するになのはの記憶が無い部分と重なっているんだ。多分、高町家はその彼らと会っているんじゃないかな？だから記憶が消されたのだとおもうよ。自分達の事を思い出させないように。彼らの一族は記憶操作とかの魔法を得意とするからね」

「なるほどね。だからそれほど考えていたんだ。でもユーノはどうしてそのロストロギアを調べているの？」

フェイトはユーノが話した言葉は理解できたが、どうして今になってそのロストロギアを調べているのかが分からなかった。もうそのロストロギアは回収されたはずなので、別にそのことで考える事なんて無いはずなのだ。

それを聞いたユーノはフェイトに答えた。

「それはこのロストロギアはもう一つ別のロストロギアと一緒に使うと発動するんだ。そっちのロストロギアは未だに見つかっていない。一度見つかったが、それは彼らが起こした事故によって今も第97管理外世界に落ちているはずなんだ」

「でもそれだけだと今さら調べる事ではないんじゃないの？」

なのはの言葉にフェイトは頷いた。確かにそれならかなり前から探しているはずだ。なのに今更になってユーノが真剣になって探すものなのかと思ったのだ。

「それはこのロストロギアが何者かによって盗まれたからなんだ。僕はその犯人は大体分かっている。彼しかこのロストロギアを盗む理由が無いんだ。もう一つのロストロギアを持っていないと意味が無いロストロギアを持っていても意味が無いからね。だから僕は彼しかないと思っている」

「その彼って誰なの？」

フェイトの言葉にユーノは言って良いのかと思った。その名前を出すとなのはが危ないのではないかと思ったのだ。

「ユーノ君、私は大丈夫なの。多分、その名前を聞いても大丈夫だと思うから」

けどなのはの言葉によってユーノはなのはを信じてみる事にした。しかしそれが、裏目に出るとは思わなかった。

「フィルノ・オルデルタ。僕は彼がこのロストロギアを盗んだ犯人だと思っている」

刹那、なのはは頭を抱え始めた。

## 第六話

「あ、ああああああああああああああああああ！！！！！！」

「な、なのは！？」

突然のなのはの叫びにフェイト、ユーノ、アルフは驚いていた。

明らかに異常で、名前を言っただけでこれほどまでに衝撃的だったのかと思った。

けどなのははこのとき、忘れていた記憶を取り戻していた。なのはにかけられていた魔法はある言葉を言われると、そのとき忘れられた記憶を全て取り戻すという魔法、多分フィルノ・オルデルタのオデルタという言葉を言われたら、思い出すように設定されていたのだろう。この魔法はフィルノ・オルデルタの両親がかけた魔法であるため、そんなふうになっていてしかもなのはだけにかけられていたのだろう。なのはの親にはもう二度と会うことは無いだろうという事と、なのはに相当の魔力が備わっているからなのはだけに施されていたのだ。しかしそれは脳に負担をかけることを忘れていたのだ。七年分なんて計り知れない量の記憶だ。それは莫大な記憶の量を取り戻し、脳に相当な負担をかけるということ忘れていたのだ。よってなのはは今の状況になってしまったのだ。

そんななのはを見ていて、フェイト達はどうすれば良いのか分からないでいた。どうすれば今のなのはを落ち着かせられるのかという事が分からないでいたのだ。

「なのは落ち着いて！！」

それでもフェイトが落ち着かせようとしますが、それはまったく持つて効果が無く、なのはは相変わらず頭を抱えていた。

「……………」

しかしそこでなのはが叫びだすのをやめて、小さく何かを言っている事にフェイトは気づき、なのはに近づいてその言葉を聞くことにした。



た。

「うん……あれ、私はどうしたんだっけ？」

「なのは……！」

数十分くらいフェイトが考えていると、なのはが目を覚まし、それにすぐに気づいたフェイトが考えている事をやめてなのはに近づいた。なのはも一分位してさっきまで何があったのか思い出していた。

「なのは大丈夫？」

「大丈夫だよ。さっきよりは気分が良いかな？」

フェイトの心配なのは本当のことを言った。あの夢の人物が誰だか思い出したので、あの夢を見ても少しは楽になり、頭の中のもやもやがなくなったからだ。

確かになのはの気分が良さそうなのにフェイトも気づき、もしかしたらと思った。

「記憶、取り戻したの？」

「うん。だからかな？私の中のもやもやが無くなって気分が良いのは」

なのははそれを言って微笑んだ。フェイトはそれを見て、前の元気なのはに戻ったのだと思った。

「あー、空気壊すようで悪いのだけど、なのはにはまだ聞きたいことがあるから」

「あ、ごめん」

ユーノが二人の空気を壊すかのように割り込んで来て、なのはとフェイトはユーノの方を向いた。そう、ユーノはなのはにまだ聞きたいことがたくさんあったのだ。それはなのはが毎回見ている夢の解決にもなるし、フィルノについて何かを知っているかもしれないからであるため、聞いておく必要があったのだ。

「別に良いよ。答えられる範囲ならだけ」

なのははその事にあっさり承諾し、ユーノの質問に答える事にした。そしてユーノはなのはに質問を始めた。



## 第七話

「まずはなのは知っているフィールノ・オルデルタの事を教えてくれる？」

「分かったなの」

ユーノに言われたとおり、なのはフィールノの事について知っていることを話すことにした。といっても、なのはが知っていることはなのは小さい頃のため、それほど参考にはならないのだが、少しでもフィールノの事を知りたかったのだ。オルデルタ一族はスクライア一族と同じで遺跡探索を生業にしているのだが、スクライア一族と違う所は基本的目立つような行動はせず隠密な行動をする一族であるので、オルデルタ一族の情報がほとんど手に入らず、入ったとしてもデマと言う可能性の高いのだ。だからまずは当時は幼くてもフィールノの性格などを聞いておきたかったのだ。それはとても貴重な情報になり、後に必要になる可能性があるからだ。

「フィールノ君は私が生まれるときからずっと近くにおいて知り合いました。幼馴染と言ってもおかしくないほどにね。物心ついた時は当たり前のようになっていてそれが普通だった」

なのははフィールノについて知つていることをユーノに話した。フエイトもそれを聞いていてなのはとフィールノの関係が気になっていた。そんな事を気にせずなのはは話を続けた。

「それで六歳の事にねある約束をしたんだ。これは私の記憶が戻つた中で一番覚えているの。夢でも見ていたものだから。あの悪夢みたいで悲しい夢を。記憶が無い時は何度も同じ夢を見て嫌になっていたけど、今はその夢を見ても悲しくも思わないし逆に嬉しい夢を」

「そのなのはが見ていた夢ってなんなの？」

フエイトはその夢がどんなのか気になっていた。昨日もなのはが打ち明けてくれたのだが、詳しい内容は聞いていないため気になったのだ。

なのはフェイトが気になっているようなので、その事を話すことにした。

「あのときはフィルノ君が私に聞いたの。『大きくなったらどうするの?』って。あの時の私は小さいから純粹に答えて、『大きくなったらフィルノ君のお嫁さんになりたいの』言ったの。あの時は小さいと言つのもあるけど、それでもフィルノ君には好意を持っていたのは確かなの。今はただの幼馴染としか思っていないけど」

なのはの言葉にユーノ、フェイト、アルフは驚いていた。六歳だとしてもなのははフェイルのに好意を持っていた。それは幼馴染で友達としてという意味ではなく、『恋』という意味だろうと三人は思った。そして、なのははそれを思い出したとき何も思わなかったのかと思った。

「今はどうなの? フィルノ・オルデルタの事を思い出してどう思ったの?」

なのでフェイトはなのはにその事を聞いた。今まで忘れられていたことを思い出してなのははフィルノの事をどう思ったのかと。

「思い出したときはフィルノ君に会いたいと思ってた。けどそれは一瞬だけで今も会いたいとは思っているけど、それほどでもなくなってる。もう昔の事だと思っているからフィルノ君の事は好きでもないと思っっているし、ただの幼馴染としか見ていないの」

「そうか。じゃあ最後に聞きたいけど、なのははフィルノ・オルデルタの魔法を見た事がある?」

「ううん、多分無いと思うの。私達には魔法の事は隠していたから」

「分かった。まだ聞きたいことはあるけど、それは今度にするよ。それほど急いでいるわけではないからね。なのはも最近は疲れていたらようだから休んだ方が良さだろうし。こっちでも何か情報が入たら一応なのはに教えるから」

「ありがとうなの。それじゃフェイトちゃん行こう」

「うん、アルフもまた今度ね」

「フェイトも気をつけてよ」

そう言っただけなのはとフェイトは無限書庫から出て行った。二人が居なくなると、ユーノはなのはが来る前から調べていたロストロギアが載っている本を読み始めた。

「一体フィルノ・オルデルタは何を考えているんだ？親の代わりにロストロギアを回収しに行くとしても何故盗んだんだ？盗まなくてもロストロギアは借りれた筈なのに。しかも今更。それになのはの夢のこともあるし何がしたいんだろう？何か胸騒ぎがするんだけどな……」

ユーノはなのはとフェイトが居る前では言わなかったがフィルノの行動に意味が分からなかったのだ。何故今更なのか？何故盗む必要があつたのか？そして、何故なのはに何をしようとしているのか？疑問はたくさんあつたのだ。

そしてその疑問と胸騒ぎは最悪な展開になる予兆である事にユーノは知らなかった。

## 第八話

無限書庫から移動したなのはとフェイトはフェイトの車で二人の家に向かっていた。先ほどよりもかなり気分が良くなっているのはをみて、フェイトは安心していた。いつもののはに戻ったからだ。多分なのはの事だから、明日には仕事を復帰するだろうなと思いながらフェイトは車を運転していた。

「そういえばヴィヴィオはちゃんと学校には行ったの？」

ふと思ったのか、なのははヴィヴィオがすっかり学校に向かったのか心配していた。

「大丈夫。ヴィヴィオはちゃんと学校には行ったよ。なのはの事で心配はしていたけど」

「ヴィヴィオには悪い事しちゃったな。フェイトちゃんにもだけどやっぱり迷惑をかけていたよね？」

なのはは夢の事で二人に悪い事をしたと思い反省していた。

「確かになのはは私達に迷惑を掛けてたけど、もう終わった事だからそこまで自分に責めなくても良いよ」

「ありがとうね、フェイトちゃん」

しかしフェイトはもう終わった事なのだから余り自分を責めないで良いよとなのはを励まし、なのははそれを聞いてフェイトに感謝した。今のおかげでなのははさらに気分が良くなっていったのだ。

「あのねフェイトちゃん。もしかしたらまた二人に迷惑を掛けちゃうかも知れない。ううん、今度は二人だけじゃないかな？そのときもフェイトちゃんは私を心配してくれる？たとえ私がか悪いことをしても」

「なのは？いきなり何を言っているの？」

「いいから答えてくれる？」

意味深そうなのはの発言に、フェイトはなのはが何を言っているのか全然分からなかった。この時は。後に気づくのが遅かったと

フェイトが後悔するような言葉だったのだ。

けど今のフェイトには訳が分からず、とりあえずなのは質問に答える事にした。

「もちろんだよ。私はそれでもなのは心配はするよ。そしてなのはがなにか悪い事をしたらあの時の私みたいに、今度は私がなのはを引き戻してあげるから」

「本当にありがとうね」

なのははフェイトからそれを聞いて嬉しかった。そしてフェイトのおかげで何かに決意していた。それはこの後に大変な事になるのに近づいていた。そして、それに気づかないフェイトは最初は気にしていたが、今は気にせずに車を運転していた。

そして数分して二人を乗せた車はなのはの家の前に着いた。

それから二人で昼食を取って、四時ごろにヴィヴィオが帰ってきてストライクアーツの為の練習を夕食まで一緒にして、夕食を食べべ終わった後は三人で風呂に入って、それから三人で寝る事になった。

そして三人が寝てから二時間後、なのはは目を覚ました。今回は夢で目が覚めた訳ではなく、元々寝るつもりもなかったのだ。それからフェイトとヴィヴィオを起こさずにこっそりベッドから抜け出し、リビングに行って洋服に着替え、それからメモ帳から紙を一枚切り、書置きをしていてそこには「ごめんね、フェイトちゃん」という一文が書いてあり、そしてなのははミッドチルダから姿を消した。

## 第九話

翌日の朝、フェイトは何も知らないまま目を覚ました。目を覚ますともうなのはが居ない事に気づき、朝食の準備をしているのだとそんな風に思っていたが、なのはもうこの家には居ない。いや、このミッドチルダにすらは居ないのだ。そんな事を知らないフェイトはヴィヴィオを起こさないようにベッドから降りて、リビングに向かった。

「なのは早いね……あれ？」

リビングに向かうとなのはの姿は見当たらず、誰も居なかった。なのはは一体どこに居るのだろうか、フェイトはなのはを探す事にした。けど家のそこら中を探したがなのはどこにも居なかった。本当になのはがどこに行ったのだろうかと思い、リビングに戻るとテーブルに一枚のメモが置いてあることに気づいた。そう、なのはがここから居なくなる時に書置きをしたメモである。それを読んだフェイトはすぐに家を飛び出して家の周りを探したが、なのはは見つかるはずもなかった。フェイトはすぐに家に帰り、電話を持ってなのはに電話を掛ける事にした。早く出てくれないかと焦りながらもフェイトは待っていたが、電話が繋がったかと思ったら「おかけになつた電話は現在電源が入っていません」という言葉が電話から聞こえてきた。フェイトは電話を切り、すぐにはやてに電話を掛ける事にした。今度は数回コールして電話が繋がった。

「うーん……フェイトちゃん、朝から一体何の用や？」

はやては眠たそうな声で電話に出ていた。フェイトはそんな事に気にせずにはやてにはやてに話したいことを話した。

「なのはが居なくなつた！」

「へ？フェイトちゃん、それは一体どういことや？」

はやてはフェイトの言葉で眠気が覚め、なのはが居なくなつたという事に驚いていた。はやてはなのはが最近元気が無いのには気づ

いていたが、それがどうして居なくなるに発展するのかが分からなかったのだ。けど今のフェイトにはその事を説明している暇はなかった。

「後でそのことは話すから、はやても知り合いに電話してなのはを探すように頼んでくれる。もしかするともうミッドには居ないかも知れないけど」

『分かつとる。こつちもなのはちゃんの情報が入り次第、フェイトちゃんに伝えるからそつちも頑張ってくれや』  
「うん、とりあえず頼むね」

フェイトははやてとの電話を切り、すぐに他の人に電話を掛けた。エリオやキャロなどなのはの知っている人物に掛け、さらにはミッドチルダなのはが行方不明になった事を気づかれないように電話を掛けた。なのはが行方不明がミッド内で知れたら大変な事になり、大問題になりかねない。ミッドチルダの戦力とも言える『エースオブエース』の行方不明はさすがに不味かったのだ。だからフェイトの身近な人物でなのはの知り合いにしか電話を掛けたかった。

「そつちもなのはを見つけたら連絡をくれてね」

何度目かの電話を切り、フェイトが次の人に電話を掛けようとしていると、ヴィヴィオが起きてきてリビングに入ってきた。

「フェイトママ、どうしたの？」

ヴィヴィオはまだなのはが居なくなつた事を知らないので、フェイトの慌てぶりに朝からどうしたのかと思ひ、さすがにフェイトの慌てぶりには何かあったのかと思つたのだ。そしてヴィヴィオはなのはが居ない事にすぐに気づいた。

「あれ、なのはママは？」

「なのははちよつと急の仕事が入つたらしくて、当分帰つてこないらしいの。だから当分は二人つきりになるかな？」

フェイトはヴィヴィオにまでなのはの事で心配を掛けたくなく、ヴィヴィオには本当の事を言わない事にした。それにフェイトは多分なのはが見つかる事はないだろうと思つていた。多分なのはが家

を出したのはフェイトとヴィヴィオが寝てから二、三時間の後になのは家を出了たと思うのでもうミッドチルダ内を探しても見つかる事はないだろうと思ったのだ。さっきまで連絡をしていたのはまだミッドチルダ内に居る可能性もあるかもしれないし、誰かがなのはを見たと言ふ事も考えられたからであり、なのはが見つかると言ふ可能性は少ないだろうとは思っていたのだ。

フェイトはとりあえず電話を置き、ヴィヴィオの朝食を作る事にした。なのはが居なくなった事により、まだ朝食の準備もしてなく、今から作る事になったのだ。

それから朝食を二人で食べて、ヴィヴィオは学校に向かった。ヴィヴィオを玄関の前で手を振り、ヴィヴィオが見えなくなるとフェイトは家の中に戻った。それからまた電話を掛けようとしたが、その前に電話が掛かってきた。もしかしたらなのはの事で見つかったのではと思い、フェイトはすぐに電話に出た。電話の相手ははやてだった。

『フェイトちゃん、今から会わへんか？どうしてなのはちゃんが居なくなつたか知りたいんやけど』

「分かった。なんなら私達の家でも良いけど」

『じゃあ、そっちに向かうな』

はやてはそう言つて電話を切り、フェイトははやてを待つことにした。やっと少しリラックスできる時間が出て、はやてが来るまでコーヒーを飲んでいる事にした。

数分してはやてはなのはとフェイトの家に来て、フェイトがはやてを中に入れた。その後フェイトははやてを椅子に座らせて紅茶を二つのティーカップに注いで、はやてと自分の前に置いてフェイトも椅子に座った。一口飲むと、はやては本題を聞こうとした。

「それで、なんでなのはちゃんは突然居なくなつたんや？しかも昨日までは元気がなかつたのに」

はやての質問にフェイトは昨日あつた事を全て話した。なのはが夢で見ていた少年、フィルノ・オルデルタの事。その彼がなのはが



忘れられていた幼馴染だった事。そして、フィルノが今、ロストロギアを盗んだとして指名手配されていることを。

「なるほどな。じゃあ一つ聞きたいんやけど、その後なのはちゃんの言動に何かあらへんかったか？ほんの些細の事でもええから」

「なのはの言動にね……あ、」

その質問にフェイトは何か思い当たる事が一つだけあった。それはなのはとフェイトが家に帰っている間での事だ。

『もしかしたらまた二人に迷惑を掛けちゃうかも知れない。ううん、今度は二人だけじゃないかな？そのときもフェイトちゃんは私を心配してくれる？たとえ私がなにか悪いことをしても』

あの時フェイトはどういう意味でなのはが言ったのか分からなかった。どうしてそんな事を言ったのか？あの時は余り考えなかったが、それがどういう意味なのか今では少し分かっていた。

そう、あの時なのはがあんな事を言ったのはもしかしたら自分が過ちを犯す可能性があったからで、そうなった場合はフェイトが自分を止めてくれるかとなのはは確認しなかったのだ。そう、なのはは記憶を取り戻した時からフィルノに会おうとしているのだと分かったのだ。フィルノを捕まえる為ではなく一緒に行動する為に。

フェイトはあの時どうして詳しく考えなかった事に後悔した。あの時気づけばなのはを止められたかも知れない。そう思ってしまったのだ。

「どうやらその反応やと、あったわけやな」

はやてはフェイトの表情を見て、すぐに分かった。そして今フェイトがあの時止めておけばこうならなかったと後悔して、自分を責めている事も分かった。だからはやてはフェイトを励まそうとした。「もう過ぎた事や。とりあえず今はなのはちゃんを探さなければな」「私が、あの時気づいていればこんな事に……」

「だからもう過ぎた事なんや！！いつまでも落ち込んでないでなのはちゃんを探すべきやろうが！！そんな事をしてもなんの解決にもならへん。だから後悔していると言うなら、なのはちゃんをはよ見

つけるべきなんじゃないか!」

フェイトがいつまでも落ち込んでいたのにはやては少しイラだっていた。今のフェイトに。いつまでも後悔しているだけでは何の意味が無いと言う事をはやては言ったのだ。

少しイラだっていたのはやてを見て、フェイトは少し驚いていたが、はやてが言った事は事実だった。こんな事をしていても何の意味が無いと気づき、早くなのはを見つけるべきだと思ったのだ。

「確かにそうね。早くなのはを見つけないとね」

「せや。はやくなのはちゃんを見つけないばな」

フェイトははやてに言われて、なのはを早く見つけるべきだと思っただ。そして、なのはを連れ戻すのだと決意した。

けどフェイトは知らない。またしてもこのことで後悔し、なのはがとんでもない事になるとは。

## 第十話

「これから、どうしようかな？」

その頃なのはミッドチルダからかなり離れて、どこかの森の中で一休みしていた。

本当ならこんな筈ではなく、ミッドを離ればフィルノがなのはの前に現れるだろうと思い、人気の無い森に移動してみたのだが、一時間してもフィルノは現れず、一人も来なかった。人が来ないのは森の奥深くなので分かっていたが、まさかフィルノが来ないとは思っていなかったのだ。まだフィルノの魔法はなのから解けていない為、居場所も分かっていると思っただけにこういう行動を起こしたのが、結果は大はずれで一時間しても来る気配はしなかったのだ。

「とりあえず少し寝てようかな？家を出てからまだ寝て無いしね」

さすがに家から出てもう七時間以上になり、ベッドで横になった時も二、三時間は居たが一睡もしてないので入院している時に寝たのが最後であったため、さすがに眠気が襲ってきてとてもおかしくなかったのだが、それでも今寝るべきなのは少し悩んでいて、それよりもフィルノを探すのを優先すべきなのではないかと思っただのだ。

「あ、でもやっぱりこれはきついかも。少し寝てようかな？」

けど結局は睡魔に勝てず、なのはは諦めて木に体重を掛けて寝る事にした。しかも少し前ののはと違って寝ることで怯える事はなく普通に眠り始めた。あの夢で出てくる人物がフィルノだという事を思い出したので何も怖い事はなくなっていたのだ。

そしてなのははいつも通り、同じ夢を見ていた。

そしてなのはが睡眠を始めた頃、ある一人の男性が立っていた。そこは第24無人世界で森林が生い茂っていた。彼はそんなところにたった一人で立っていたのだ。

「もう少し待っていてくれ。まだ、俺にはそこに行けないんだ」

まるで誰かが居るように彼は言っていて、そして悲しそうだった。フィルノ・オルデルタ。そう、彼こそがマイスアピートというロス・トロギアを盗み、ユーノが今懸命に調べている人物で、なのはの幼馴染である。

そんな彼がどうしてこんな無人世界に居るのか、それはフィルノ本人以外には分からなかった。

そしてフィルノはまたしても独り言を良い始めた。

「なのは俺の記憶を取り戻したようだけど、あの夢の事をどう思っているかな？記憶が取り戻せるまで悪い事をしちやったしね」

フィルノは少し自嘲気味に言いながら、微笑んでいた。けどそれはフィルノにとって気持ち悪かった。どうしてなのはを苦しめたのに微笑んでいられるのか。そんな自分自身が気味悪かったのだ。そしてフィルノはため息を吐くと言った。

「もう、侵食は始まり始めているんだな。ほんの少しながらも」

今度は独り言でも訳が分からないような言葉だった。なのはと分かれてからフィルノに何があったのか。それはフィルノ本人しか知らなく、フィルノ以外には答えられる人物なんて誰もいなかった。

そこでフィルノはある事を思い返していた。それはなのはが見ている夢であった。

「けど、俺はもうあのときには戻れないのか。こんな体だしそれに目的のためなら全てを犠牲にしてきたんだからな」

そう、もうフィルノに後戻りという言葉は無かったのだ。

そしてまたしてもなのはが寝るたびに見る夢を思い出してみた。

『大きくなったらどうするの？』

そう、六歳のときになのはとフィルノが約束をした夢。

「大きくなったら？」

それは何度もなのはが見ていた夢で、何度も同じ夢を見てその夢が怖くなった夢。

「そう、大きくなったら」

そして、その夢はこの物語の始まりともいえる夢。

「大きくなったらフィルノ君のお嫁さんになりたいなの」

いや、そのときから始まっていたとも言える夢。

「僕のお嫁さんになりたいの？」

または全てはここから始まり、それがこれから始まるうしている悲劇の原因とも言える夢。

「うん」

そんなことはまだなのはもフェイト、そしてみんな知らない。

「分かった。大人になったら結婚しよう」

知っているのはたった一人だけ。けどその一人も自分がこんな事を起こすとは思わなかっただろう。

「うん」

そう、

フィルノだけがこの先の展開を知っていて、自分がこの後何をするのかを全て知っているのだ。

すべては自分のため、なのはのため、そして復讐のために彼は動いているのだ。そしてそのためなら全てを犠牲にしようと思えばしようとしているのだ。

「……さて、そろそろ行きますか」

フィルノはあの頃の事を思い返すことを止め、ここから動くこととした。すぐに魔方阵を発動してフィルノはこの世界から移動した。

## 第十一話（前書き）

すみませんが、一度最初から読んでください。

設定や時系などかなり変わりましたので読み直してくれた方がよさそうなので。

## 第十一話

「なのはちゃんはまだ見つからへんのか……」

はやてはフェイトとはやての守護騎士であるヴォルケンリッター達を集め、フェイトとなのはの家に集まっていた。

なのはが行方不明になってからもう一週間と二日が経とうとしており、まったく持つてなのはの居場所が入らないまま時間が過ぎていくだけだった。まだなのはが行方不明になっているという事は管理局には知られておらず、管理局には気づかれないように行動をしているのだ。

ちなみに、スバルやティアナ達はそれぞれ仕事が忙しいらしくここには来ていないが、一応なのはが行方不明になっているのは知っているので仕事しながらもなのはの情報を集めているところである。

「それにしてもそのフィオル・オルデルタというのはどんな奴なんだ？」

守護騎士の一人である鉄槌の騎士、ヴィータが質問する。

「それが、余り分かっていないんや。一番知っているユーノ君もフィオル・オルデルタの事は会った事も無いらしいし、幼少期の頃に会っているなのはちゃんは行方不明だから何も分からないんや。

フィオル・オルデルタの経歴も大半は嘘やったし」

「つまり手がかりはあんまりないというわけか」

同じく守護騎士の一人である剣の騎士、シグナムがはやての言葉を聞き、確認をする。

「その通りや。フィオル・オルデルタの魔力量、魔法クラス、経歴なども全てが嘘なんや。本当のこととも含まれているかも知れへんけど、どれが本当のことなんで分からないんや。分かる事と言えばフィオルの両親の事くらいやな」

「フィオルの両親に何かあるのですか？」

守護騎士の一人である湖の騎士、シャマルがはやてに聞く。

「十六年前、ちょうどなのはちゃんがあの事件で重症を負った時や。私達はその事件には関わって無いんやけど、二人の夫婦がある実験をしておつたらしくて管理局に逮捕されたらしいんや。二人は自分達が無実だと言っていたんやが、逮捕されてから三日後にその二人は牢屋の中で何者かによって殺されていたんや」

「もしかしてその夫婦が」

「そうや、フィオル・オルデルタの両親や。そしてその事件は夫婦が殺された事によって事件が未解決のまま終わっているんや。まだ犯人だと決まったわけでもあらへんのにや」

「それって管理局が何かを隠そうとしているのでは無いのですか？」

はやてが創った人格型ユニゾンデバイスである、リインフォース  
IEIがはやてに聞いてみる。

「そこまでは分からへん。けど、あの事件には何かあると思うんや。なのはちゃんを探すのももちろんの事やけど、こっちの事も調べた方が良さそうやな」

「じゃあ私とシャマルでその事件の事を調べてみる」

「じゃあシグナムとシャマルは時間ある時でええから、フィオル・オルデルタの両親が逮捕された事件を調べてくれるか？ 他のみんなは今までどおり時間がある限りでええからなのはちゃんを探す事



でええな。フェイトちゃんもそれでええよな？」

「あ、うんそれで良いよ」

はやては今まで一言も言っていないフェイトに確認を取ると、フェイトはまったく今の話し合いが自分は関係ないという感じみたいに聞いていなかったようだ。

フェイトはなのはが居なくなった日、はやてに怒られてなのはを絶対に見つけると決意したのに、またしても自分を責めていたのだ。フェイトの反応を見てその事に気づいたはやては、何を考えているのか分かっていった。

「フェイトちゃん、まさかと思うけどなのはちゃんが居なくなったのは自分のせえだとまだ思っておるのか？」

「それは……」

「前にも言ったけど、それはフェイトちゃんが悪いわけではない。なのはちゃんが独りで決めて行動した事だから、フェイトちゃんは責められることはないんや」

「けど、私が気づいていれば……」

「そう思っているんやったら、早くなのはちゃんを見つけるべきなんやないか？これも何度も言ったことやで。フェイトちゃんが自分を責めことは分かるけど、その責任を持ってなのはちゃんを絶対に探すと思わないか！今のままやと、なのはちゃんが居なくなった時のフェイトちゃんとまったく変わっておらへんで！！」

はやての言葉を聞いてフェイトはなのはが居なくなった時からまったく変わっていなかった事に気づく。そして自分は何をやっていたのかと思い、はやての言葉で改めるのだった。

「……うん、そうだね。ごめん、なんかみんなにも迷惑を掛けてたね。なのはが居なくなつた時にはやてに起こられて決意したのに、

結局私は自分のせいだと責めてた」

「そのとおりだテストロツサ。今自分を責めていても意味が無いぞ。とりあえず今はなのはを見つける事を優先にすべきだ」

「まあ、それによって倒れちゃったら意味が無いのですけどね」

リインの言葉によってみんなが苦笑し、重い空気が和やかになつていた。

フェイトもシグナムによって励まされたおかげで、元気が出てくるのだった。

そしてはやてはその空気の中話を続け始める。

「さて、さつき決まったようにシグナムとシヤマルはフィオル・オデルタの両親が逮捕された事件の事を調べ、他のみんなは引き続きなのはちゃんを探してくれるか？本当なら本格的に動きたいところやけど、なのはちゃんが行方不明だと分かっているのはまだ管理局には知られておらんのだ。なのはちゃんの仕事先には高熱が出たから休暇を取って貰っているけど、それもいつまで持つか分からへん。なのはちゃんが行方不明だと管理局が知ったら大変な事になるから、それまでにはなのはちゃんを見つけられるように頼むで。それじゃあ解散や」

最後に確認を取りながら、はやてはここに居るみんなを解散させる。それぞれが家から出て行く中、家の中に残ったのはフェイトとはやてだけになっていた、はやては集まる前に後で二人で話があるとフェイトに言ってあった為、はやてはまだ帰らずに残ったのだ。そしてフェイトとはやて以外が家から出て行くと、二人はリビングにあるソファに座るのであった。

「はやてごめんね。なのはが居なくなつた時もはやてに怒られたのに、あの時からまったく変わっていなくて」

「別にかまわへんよ。それより、ひとつ気になっている事があるんやけど」

「何？」

はやてが気になっている事はなんだろうかとフェイトは思いながら、はやての質問を待つ。

「何故なのはちゃんは私達親友を置いて幼馴染だったフィオル・オルデルタに会いに行こうとしたんやと思う？しかもフィオル・オルデルタは次元犯罪者とされておる人物やで。そんな人物になのはちゃんが会うなんて、なのはちゃんの性格からしても思わへんのやけどな」

「それは私も思ってた。なのはが単独で行動を起こす事は今まで無かった」

「一体、二人の関係に何かがあるんやろうか？多分、なのはちゃんは過去にフィルノ・オルデルタから何かを約束していたんやないかと思うんやけどな。なのはちゃんがフェイトちゃんに話した夢とは違う何かがある」

はやてがフェイトに話したかった理由、それはどうしてなのはが幼馴染の為に行方不明になったかという事だ。確かになのはなら幼馴染の為に親友より優先して会いに行くような人物ではないはずだ。しかしなのはは現に幼馴染に会いに行く為に行方不明になっているため、何かなのはとフィオルの間には何かあるのだろうと、はやてとフェイトは思っていたのだ。

「けど私達がそれを考えても分かるわけが無いよ。それを知っているのは多分なのはとフィオルの二人だけしか知らない事だから、私達に知りようが無いし」

「せやな。だったら早くなのはちゃんをフィオル・オルデルタと会

う前に見つけるべきなのかもしれへんな。暇があるときはなるべく疲れない程度になのはちゃんを探すのに急いだ方がええかもしれへんな」

「そうだね。じゃあ今日は仕事も無いから、私は出来るだけ多くの管理世界を探してみるよ。多分なのはもうこの世界には居ないと思うし、なのはが知っている次元世界の座標は管理世界と第97管理外世界ぐらいだと思っからね」

「わかった。わいも仕事の合間を使ってなるべくなのはちゃんの情報を手に入れられるようにするつもりやから。それじゃあわいは行くで」

はやてとフェイトが思っていた疑問を話し終えると、はやては自分の仕事がこの後残っているのだから家に帰るのだった。

フェイトもなのはを早く見つけるためにも、はやてが家を出た後に家を出る準備をし、フェイトのデバイスであるバルディッシュ・アサルトを持って家を出るのだった。

## 第十二話

フェイト達がなのはを探している頃、なのははある森林の奥深い中で休んでいた。

ここは第26管理世界であり、その近くに町があるところの森林に居たのだ。

なのはが行方不明になってから、なのはは管理世界を転々と移動しており、一度食料を調達する為に別の管理世界で町の中に入ったが、そのときなのはを見かけた人たちは「エースオブエース」がどうしてここに居ると思いながら驚いたりしている人がかなり多かった。

けどなのはを見て驚く事しか思っていないような感じだったので、なのははまだ自分が行方不明になっているわけではないのだと理解する。自分が管理局から行方不明扱いにされていたのなら買う物を買ってすぐに別の世界に移動しようと思っていたのだが、行方不明だと知られていないと分かったのでまだ安心して行動ができると思ったのだ。自分がまだ行方不明扱いにされていないのは、多分自分が行方不明になったら管理局が大変な事になると、フェイトやはやてなどがまだ知らせていないのだろうと思った。

しかしそれでもフェイトやはやてがなのはを探しているだろうと思うので、なるべく姿を現さないように森林の中に隠れるようにしていたのだ。

「今さらだけど、フィルノ君の居場所を知らないのにどうして出ちゃったんだろう？もうちょっと考えて家を出るべきだったかな」

あれから約一週間も経つというのに、フィルノがどこに居るのは分からないのは、世界はかなり広いというのにまったく持ってフィルノを探す方法を考えていなかったのだ。なのはの出身である

第97管理外世界に居るかもしれないとは思ったが、もし運悪くアリサやすずかにあつたとすればすぐにフェイトたちに居場所がばれてしまう為、第97管理外世界には行っていないのだ。

なのはは自分の後先考えずに家を出てしまった事に少し後悔をしながら、一休みでもしようと思つて木に寄りかかつて寝ようとした。しかしなのははそれから寝る事は無かった。

「誰か近くに居る」

突然、何者か分からない足跡が聞こえてきたのだ。普通、こんな森林の中に人が歩く事なんて早々ありえない。あるとしてもこの森林に何かあるか、なのは居場所を見つけた誰かがなのはの居場所をフェイト達が見つけて連れ戻しに来たかの二つだった。

なのはは足音が聞こえる方向を向き、警戒心を出していた。

次第に足音が大きくなつていき、見つかった時のためにレイジングハートを右手で握りて息を潜める。だんだんとこちらに近づいてくるのが分かり、何事もないように終わるのを待つのだった。

しかしなのははから十メートル辺りで不意に足音が消え、なのはは向こうが自分に気づかれたと思う。それを確かめるために、なのはは意を決して様子を見ることにした。

そこには四、五人の白衣を着た男達と子供が入るぐらいの袋が近くに置いてあり、そして何かを話しているようだった。それを見たなのはは姿から見てどうやら自分を探すために来たわけではないとすぐにわかり、向こうに気付かれないように安堵の溜息を漏らし、一応様子をうかがい、耳を澄ませて向こうの話を聞くのだった。

「しかし、今回は良い実験材料が入ったな」

「ああそうだな。今回ばかりは失敗なんかしたら上からかなり怒られるから気を付けないとな。今回確保した奴は、生まれながら魔導師ランクがS+という化け物に近いからな」

「なるべく慎重にですか。難しいことを言ってきましたね」

「仕方ないだろ。上の奴らは俺達の事なんか気にしてないのだし、ただ成功するかしないかしか見てないんだから。あいつらにとって難しいかろうと関係なんだよ」

「もうちょつと気にしてもらっても良いのですのにね」

「そう言うな。そもそも俺達もこんなことをして普通の生活なんかしていないのだから。とりあえず休憩は終了だ。もう少しで着くのだから先に進むぞ」

「了解」

そう言った彼らは近くに置いた袋を一人が持ち上げて、先に進むために森林の中を歩いて行った。

それを見送り、一部始終を聞いていたなのは彼らが話していた話がともまともな話ではなかったという事を知り、数分の間だけ足が震えて動けないでいたが、すぐに持ち直してこの後どうするか考える。

「今の私はまだ搜索がされていないことは分かったから、あの人達の後をついて行っても管理局として何とかなるけど、そんな事をしていたらフィルノ君を探すのが後回しになってしまう。けどあの人達が言っていた事は聞き捨てなれないし、そうみすみすと見逃すわけにもいかないし……」

なのははさらに考え、そして数十秒もしないうちに答えを出す。

「やっぱり、あの人達が言っていた事を見逃すわけにはいかないの。人体実験なんて、そんなの酷すぎる。フィルノ君に会うのに遅くなるかもしれないし、もしかしたらフェイトちゃん達に見つかるかもしれない。けど私は助けを求めている人は絶対に助ける！」

なのははそう決意すると、すぐに立ち上がって彼らを追うことにした。

たとえフィルノに会うのが遅くなろうと、目の前に助けを求めているだろう人達を見逃すなんて言うことはしたくない。彼らが何故こんな事をしているかという事を知り、それを阻止するためであるのだ。それがなのはの信念でもあり自分の意志であるのだから。

しかし、今回なのははこの選択が自分の人生を大きく変えてしまうことだという事をまだ知らない。今まで平和だった日常ががらりと変わり、今までの信念が打ち砕かれるという事を。



## 第十三話

なのはは先ほど聞いた話を聞いて彼らの後を追っていた。どうするか考えている間にかなりのタイムロスをしてしまったため、かなり先まで行ってしまったが、彼らが歩いて行つた方向が分かっている為、迷わずそっちの方向へ走って行つたのだ。

それでもかなりの距離が離れているし、全力で走らないと追いつけないぐらいで、かれこれもう二十分以上は走り続けている。デバイスを起動させて上空を移動するというのもあるが、上空を移動することになるとその分フュイト達に見つかる可能性が高くなる。なのでなのはが取つた行動がなるべく見つからず、尚且つ先ほどの白衣を着ていた彼らを追える最善の方法なのだ。

（　　）　　はあ、はあ、もうちょっと運動しておけば良かったかな。昔から苦手だったけど、魔力に気付かせないようにするには走るしかないの）

しかしなのはは魔法で移動する事が多いし昔から運動は苦手なため、なのはは走って十分もしないうちに早く息を切らしながら走っていたのだ。魔法を使えば相手に魔力が探知されるかもしれないので走るしか方法がないため、たとえ運度が苦手でも走るしかないのだ。

けどなのははそんな事で諦めずに前に向かって走っていた。そんなほんの些細なことで諦めていたらアホ臭いし、そもそもなのはがそんなことで諦めるわけがなかった。かなり汗もかなり掻いてあつたが、周りが森林なおかげもあつて涼しさを感じられ、三十分走りっぱなしにしてはそれほどでもなかった。息切れは起こしていたが、まだ走れるぐらいではあつたのだ。

それからさらにはしつて数分後、なのはが走っていると、この先

には森林の中にはかなり不自然な大きな扉みたいなものがあり、なのは一度近くの木に潜めるのだった。

（あれは一体なんなの？とても不自然の中にあるけど、扉の先には一体何があるというの？しかもこの場所って、上空から見ても全く気付かれないところに建っているし）

なのは一度周りを見てみると、ほかの所より先ほどまでなのはが居た所の森林の大きさよりかなり大きくなっており、倍以上の木々もあるような感じであり、その森林がこの大きな扉を隠しているのだった。どうやら先ほどの森林の場所よりもかなり深いところに居るらしく、普通にこんなところに入ってしまったら迷ってもおかしくないような場所で、それを見つけた人から見ればどう見ても何かに隠れて建てられたものだとは分かってしまいうぐらいなほど、とても怪しそうなところだった。

そして、その入り口の前には先ほどの白衣を着た彼らがおったが、なんか入口の前で慌ただしくしていた。その理由を確かめようとなのは木の中から様子をうかがうと、どうやら彼らが運んでいた袋の中で何かが暴れているらしいことが分かった。そしてその暴れ方はどう見ても人間が袋に閉じ込められた時と同じような暴れ方で、彼らはどうやって止めるべきか考えているところだった。なのはが最初に彼らの話を聞いていた時の話が本当なら、あの袋の中に入っているのは多分魔法ランクがS+もあるくらいなので、あんな袋くらしいだと簡単に破けてしまい、逃げ出してしまうため、彼らは冷静にあの袋の中にいる者をどうやって治めるのか考えているのだろうと、なのはは思った。

「レイジングハート、念のため起動させておくよ」  
了解マスター

「レイジングハート・セットアップ」

なのは相手に聞こえないぐらいの声で言い、同じく小声でレイジングハート・エクセリオンを起動させる。

バリアジャケットを羽織り、レイジングハートをアクセルモードにしておきながら木に背もたれながら待機するのだった。

そしてそれから数分秒もしないうちに、袋の中に入っていた者が自分の魔法を使って袋から破いて姿を現すのだった。袋の中にいたのは16歳ぐらいの少女であり、どうやらあの子供ぐらいが入る袋にかなり押し込まれて入られたようだ。

しかし出たところまでは良かったが、彼女が今いる場所は敵地のど真ん中と言ってもよく、たとえ彼女を運んでいた彼らを撒いたとしても、この森林周辺は彼らの縄張りに近いものであるため、すぐに捕まってしまうだろう。魔力が良かったとしてもこの周辺の地理を知っていると知っていないだけで、かなりの違いがあるのだから。また、上空を飛ばばすぐに解決するかもしれないが、彼女はなのから見た限りではどう見ても空戦というより陸戦の魔道師に見え、現に彼女は陸戦魔道師であったため、走って逃げるしか方法がなかったのだ。

それでも彼女は、たとえ無駄かもしれないとしても逃げ切つて見せようとして、森林の中に走って行った。なのは今すぐ出て構わないと思つたが、もう少し様子見をすることにした。もしかすると彼女は逃げ切れるかもしれないし、彼女が逃げ切つている間にも彼らが増援を頼めば、あの大きな扉が開いて中に入れるかもしれない。かかったからだ。本当なら彼女を救つてもいいのだが、最善の策としてそれが一番いいのだろうと思つたのだ。逃げ切つたとしたらさらに良いことだし、たとえ捕まつたとしても自分が救えばいいと思ひ、さらに言うならば、相手は研究の為に働いている人が多いため、それほど強くもないのだろうとなのは思つたのだ。

そして彼女が走って行ってから数分後、なのはの予想通りにその大きな扉は開き、約二十人ぐらいの人達が表れて一斉に彼女が逃げ

た方向へ走って行った。どうやら彼女を確実に捕まえようと、かなりの数を出していったのだろう。なのはは彼らの魔道師ランクが最高でもAAAランクだと感じながら、彼らが居なくなるのを待っていた。

「今だ！」

彼らが居なくなったのを確認すると、なのははあの大きな扉が閉まる前に中に侵入しようとして、そこから一気に走り、そしてその扉の中に入ったのだ。

しかしなのははそこで走って来ているときにも感じた同じような違和感を感じた。なぜならなのはは大きな扉の中に入ったとしても、その扉は全く閉まるうとしなかったのだ。走っているときも普通自分たちの縄張りに近いなら気付かれてもおかしくないのに、全く人の気配が無かったのだ。

そしてなのはは大きな扉の中に入って数分してその大きな扉は閉まったのだ。なのははどうやら自分が招待されているのだろうとすぐにわかり、奥に進んでいった。かなり先まで続いており、森林の時の涼しさと同じくらい涼しいが、臭いは無臭で、通りの壁にはいろいろと管みたいなのが続いていた。

それから少し歩くとかなり大きいところに出てきて、周りにはカプセルの中に何かの液体を入れた人間たちが置いてあった。その広い所の構造がまるでジェイル・スカエリッテイが使っていたスカエリッテイラボに似ていた。

なのはは周りを見て、顔を前に向けると、なのはの少し先に何者かが立っており、なのはが立ち止ると背中を向けていた体をなのはの方に回転させた。

「ようこそ、我がラボに。『エース・オブ・エース』こと高町なのは二等空佐」

彼はフツケバイン事件の後に、世間的なこともあるために、昇格しても戦技教導官として働くことを条件付けて仕方なく二つ昇格したなのはをそう呼び、なのははその呼び方に嫌味らしさが感じた。

「それで、私をわざとここまで来させて一体私に何の用なの」

「君が来たのは私たちが確保した彼女を救うためであって、ここに来るのは単なる偶然。君は本来ならば来るはずがない客なのだから」「答えになってない！わざわざ何のために私をここまで来させたかを聞いているの！！」

「まあ、それはのんびり座りながら答えようではないか。立ち話もなんだと思うからさ。言っておくが、この場所が敵地だということ忘れてもらっては困るよ。君が何かをすればすぐに君を捕まえることや殺すことなんて可能なんだから」

「……分かったの」

「それと念のためバリアジャケットも解除してもらおうと嬉しいのだが」

なのはは彼の言うことを聞き、無言でバリアジャケットも解除した。ここは彼の言うことを聞いていたほうが得策だろうと思ひ、もし彼に刃向ったとしたら簡単に捕まってしまうだろう。先ほどの彼の言葉には事実の様に聞こえたし、嘘は付いていないとなのはは思ひ、彼に従うこととしたのだ。

「それではついて来たまえ。ここだと話しにくいだろうし、話しやすい所に行った方が良いだろ」

「それは私に氣遣って言っているの？」

「まあそんなところさ」

なのはが彼の後ろついて行きながら、彼はこの広い所にあった一

つの方に向かっていくのだった。

## 第十四話（前書き）

超お久しぶりです。

未だに応募する小説の方が忙しいのですが、息抜きもかねてこちらを書いてみることにしました。

一応終わり方以外はプロットは完全に固まっているのですね。最後だけEND分岐でもしてみようかなww

とか言っつてそんなことは多分しないんですけどねww

さて今回、正直言つとForceについての独自の解釈を入れています。

まだForceとvividは完結してないのでどうしてもForceの二年後となると、独自の解釈や設定が必要となりますので。

また、今回はなのはがアンチ管理局になる発端という感じですね。

久々の投稿ですので何か変でしたら教えてくれるとうれしいです。

それではごっごぞー！

## 第十四話

部屋に案内された場所は先ほどのスカエリッティ・ラボに似ている構造とは大きく違い、ごく普通にあるような応接間みたいな感じだった。しかも場所違いなほどに家具などが豪華であり、先ほどいた所が嘘のように思えたくらいだった。

なのはは部屋に入るとすぐに部屋の豪華さに驚いたが、すぐに落ち着いて彼の後ろについて行く。彼を後ろから睨みながら。

だが彼もその事には気づいており、彼はその部屋にある中央のソファの内の一つに座る。

「それでは反対側のソファに座ってくれ。それと、先ほどから私を睨むのをやめてくれないかな？話しづらくなると思うのだが」

「それは分かったの。考慮するけど、さすがに睨まないのは無理かもしれない」

「それもそうだな。まあ、考慮してくれるだけ嬉しいよ。とりあえず座りたまえ」

なのはは彼の言われるままに反対側の椅子に座った。

なのはがソファに座ってから、彼はすぐに話し始める。

「こんな部屋なのに飲み物も用意できなくて済まないね。これでもおもてなしぐらいはしたいのだが」

「別にそんなこといいよ。私はあなた達が何をしているのか知りたいただけだから。場合によってはここで逮捕するつもりだけど」

「ああ、分かっているよ。けどその前に私の名前を名乗っても良いだろう」

「まあそれくらいなら……」



なのは名前を名乗るくらいなら構わないと思って、彼に名前を名乗らせても良いと答えた。

「すまないな。私の名前はラスティル・エメリアだ。一応この研究長という事になっているが、これでも29歳だ。君も念のため名乗ってもらえるか」

「……時空管理局本局武装隊、航空戦技教導隊第5班、高町なのは二等空佐。これでいい？」

「構わないさ。さて、自己紹介も済んだことだから君が聞きたいことに答えてあげよう」

彼、ラスティル・エメリアは自己紹介を済ませると、すぐになのはが思っていることを答えることにした。

「まず、私たちが何をしているのかというのは、見ての通りの人体実験だ」

「じ、人体実験!？」

「そうだ。そして私はここの指揮をしている立場のものだ」

「どうして!! どうしてそんなことをしているの!？」

「研究者というものは、実験していないといられないような人間たちばかりだからな。もちろん私もその一人だが」

「でも! そんなことしたら管理局が黙っている訳が」

「確かにそうだな。管理局にはここの場所の事は知っているだろうからな」

「管理局が気づいている? だったら、どうしてあなたたちを逮捕しないの!？」

「それはなんとなく気づくのではないか? 多分君は、私の部下達の話盗み聞きして来たと思うからね。そうでないとここに来ないと思うのだが」

「確かにそうだけど……」

そこでなのはここに来るまでに追ってきた白衣を来ていた男性達の会話を思い出そうとする。

そしてあることに気づいた。彼らが会話していた言葉に気になる言葉があつた事を。

「そういえば、『失敗なんかしたら上からかなり怒られる』みたいな事を言っていた……」

「やはりそんな事を言っていたか。少しは周りを気をつけると言つてあるのに……」

なのはの言葉を聞いてエメリアは溜め息を吐くのだった。

しかし、なのははそれを思い出してエメリアにどうということなのかを聞こうとしていた。

「どうということなの？ 『上』って言っているという事はあなた達が従っている奴らがいるという事なの！？」

「……確かにそうだ」

「ならその『上』とはなんなの！！ それに、先ほどの管理局とどういう関係があるの！！」

「それは、少し考えれば分かるんじゃないか？ 『上』と管理局が逮捕してこない理由の二つがどういふ事を指しているか考えればね」

「だから、それが一体……まさか、」

なのははエメリアの言った、『上』と管理局が逮捕してこない理由の二つが何を意味しているかやつと分かったようだった。

けどそれは、なのはにとって信じがたいようなことだった。

「……どうやら、気づいたようだね。私たちがやっている実験は管理局によって守られてるのだよ」

そう、こんな人体実験などをしている研究所が管理局と関わっていることを指していたからだ。

「どうして、どうしてあなた達みたいなのが、管理局と関わっているのー!」

「いや、それは逆だよ。私たちは元々こんな実験をしたわけではない。『上』命令されて行動しているだけだ。そこまで言えばどういふことが分かるのではないか?」

「ま、まさか管理局が!？」

「そういふ事だ」

なのははエメリアが言った言葉に驚いていた。

まさか、この実験が管理局からの命令によって動いているとは思っていなかったのだ。なので、まだ信じられないでいた。

それはなのはにとって今まで信じていた管理局に裏切られたという事だからだ。

「う、嘘だ。管理局がそんなことに加担するわけがない!」

「じゃあ、君が一つ関わった事件、フツケバイン事件はどうなんだろうな」

「どういふこと? どうしてその事件が関わってくるの?」

フツケバイン事件。エクリップスウイルスに感染しまった者たちによって起こった事件。

また、スバル・ナカジマに助けられて、今はスバルの家族になったトーマ・アヴェニールも巻き込まれた事件でもある。

そんな事件がどうして今出てくるのか、なのはは分からないでいた。

「そもそも、あの事件の発端は何が原因なんだ？」

「発端って、確かエクリプスウィルスに感染した人たちによって起こってしまった事件のほすだけど？」

「その通り。そしてその間にトーマ・アヴェニールが研究施設に侵入して、そこで拘束されていたリレイ・シュトロゼックを助けて救出したという事があつた」

「それが一体なんなの」

勿体ぶるような言い草に、なのはは少しじれったく感じていた。

「リレイ・シュトロゼックはあの時トーマ・アヴェニールに救われなければどうなつていたと思う？」

「そういえば、その研究所の事は詳しく教えられてない……」

「やはりそうだろうな。あの時はフツケバルン事件で忙しかつたらうから教えてもらつ事もなかつたのだろう」

エメリアは予想通りなのは達がリレイ・シュトロゼックが捕えられていた研究所を知らないようだと思つた。

そう、あの研究所の事はなのはを含め、フェイトやはやて達も詳細を知らされていないのだ。

それに、フツケバルン事件の事があつたために、そのことを聞く暇などはなかつたのだ。

だからあの研究所で何をしていたのかという事をなのは達は知らないのだ。

エメリアはあの研究所で行われていたことをなのはに話し始めるのだつた。

「あの研究所は因子適合者を作るためにエクリプスウィルスの感染源をつかつて因子適合者を生み出そうとしていた施設だ。そしてリレイ・シュトロゼックはその失敗作であつて、感染源である彼女が

ら因子適合者になれたものはおらず、破棄されようとしていたんだよ」

「なっ!?!」

なのははそれを聞いて驚きまくっていた。まさか、あの研究所でそんな事が行われていたという事を知らなかったのだ。

なのはが驚いているのを無視して、エメリアは話を続ける。

「そして、あの研究所に向かった管理局は、多分エクリップスウィルスの感染源であるリレイ・シュトロゼックが誘拐されたとか聞かされていないはずだ。君はそこにいなかったから分からないかもしれないが」

「たしか、あの研究所は管理局が後ろに付いていたはず。っていう事は本当に!?!」

「そういう事だ。管理局はこの場所を含め、そういう人体実験などを平気でやり遂げる。管理局というのはそういうところなのだよ」

衝撃な事実を聞かされ、なのはは驚きを超えて啞然としていた。今まで信じていた管理局に裏切られたように思えたのだ。

しかし啞然としても、一つだけ気になることがあった。

「……どうして、どうしてこんな話を私に話したの? こんな話、私に話す理由なんてないはず」

「確かに本来なら君に話す事ではないね。ただ、私もそれとは別に『裏』である方と一緒に動いているのでね。君でなければこんなこと話してないよ」

「ある方?」

「フィルノ・オルデルタ、と聞けば分かると思うが」

「フィ、フィルノ君!?!」

まさかこんなところでフィルノの名前を聞くとは思っていなかったのは、かなり驚いて大きな声を上げるくらいだった。

エメリアはなのはの驚きを気にせず話を続ける。

「まあ、彼とは利害が一致しているから、共に行動しているだけだな」

「ど、どうしてフィルノ君があなたなんかと」

「君から見ればそう思うだろうな。けど、私も管理局にはかなりの恨みがあるものでね。今は気づかれないように、一応この研究長という表の職に就いているのだが」

そこで一泊おいて、エメリアは話を続ける。

「私の妹は、管理局の人間でもたった数名しか知らないある所に閉じ込められてる。いや、監禁されていると言っていいかもしれないな」

そしてエメリアは自分の妹の事を話し始めるのだった

## 第十五話（前書き）

……今回で終わるはずだったのに次話まで行っちゃったw

とまあ、今回の内容は……なのはもでませんww

ってか今回は行間のように行間のようにではない感じですよ。

相変わらず不定期ですが見てくれるとうれしいですよ

## 第十五話

その頃、第74管理世界のある研究所にて、あることが行われていた。

「まったく、管理局もよく平気にこんなことを頼むよな。まあ、私もそう言いながらもこんなことをしているのだがな」

その研究長である、白衣を着て黒髪の男性フォルベルクは目の前の人間が入るくらいポットを見てそう呟くのだった。

そのポットの中には黄緑色の液体が満杯に入っており、その液体の中に16歳くらいの桃色のショートヘアをしている女の子が裸で入っていた。

女の子の体には、たくさんのコードがくっついており、何かをしているようだった。

「リンカーコアの魔力総量を強制的に上げるか…… それほどまでして管理局は武力を手に入れたのかね。下手をすると暴走しかねないし、もしくはリンカーコアが壊れてしまうぞ」

彼は女の子が入っているポットを見ながらそう呟いた。

ここで行われている実験は人間の中にあるリンカーコアを弄って、人為的に魔力総量を上げようという実験であった。

今まで何人もの実験をしてきたのだが、全てが失敗に終わり、大半の人間がリンカーコアが壊れて魔法が使えなくなり、一部は暴走して失敗作としてすぐに殺された。

また、魔法が使えなくなったものはそのまま返してもこの研究所の実験の内容がばれてしまうので、一ヶ所に纏めており、他の何か利用できるかもしれないという事で殺されてはいないのだ。



言葉だけ聞けばまとものように思えるかもしれないが、先ほど言った通り何人も失敗した人間が現れており、魔法すら使えなくし時点で人体実験に等しい事をしているのだ。

さらに言えば、リンカーコアの魔力総量を上げるという事はスポーツで言うドーピングみたいなことであり、努力している人間からすれば嫌な事でもあるだから、良いことと考えるのは良くない事であった。

「フォルベルク研究長、ちょっと見てください」

近くで画面を見ていた一人の研究員がフォルベルク研究長を呼び、研究長にさつき見ていた画面を見せた。

そこには二つの波があり、一つの波がもう一つの一定の速さを保っている緑色の波と、一緒の速さになって一定の速さを保っている波と重なったり、だんだんと遅くなっていたりしている赤色の波の映像が見えるのだった。

その波はポットに入っている人間のリンカーコアから感じる小さな波を察ししたものと、もう一つは魔力総量が大きいSSランクある人間のリンカーコアから感じる小さな波をデータ化したものである。

波が合わさるという事は、波の速さが変動している方のポットの中に居る人間のリンカーコアが、一定の速さを保っているSSランクの人間のリンカーコアと同じになるうという事なのだ。

また波が合わさっても、SSランクの人間の魔力総量と同じになるだけであるため、別にSSランクある人間の同じ魔法を使うというわけではない。要は魔力総量だけを強制的に上げようとしているのだ。

「ま、まさかこれは」

「ええ、一瞬だけですが確かに重なっています。もしかすると今回

は成功する可能性も」

「ついにこの時がやってきたか！！　ここまで何回失敗したことか」

フォルベルクは今までの実験の繰り返し、何度も失敗していたので、今回の成功は今まで何年も掛かっていたので、かなり嬉しい事だったのだ。

本来ならそんな費用なんてあるはずがないのだが、管理局が後ろで援助しているので、何度失敗しようとする費用で問題になる事はないのだ。

「それで後どのくらいなのか？」

「もつ少して全てが終わる予定です。その時点で今までの状態が続けば、成功するはず」

「ならば、その状態を維持して様子を見ておいてくれ。下手に何か量を増やしたりしたら大変な事になりそうだからな。それまで私はちょっと離れて管理局に報告をしてくる」

「分かりました。何かありましたら呼びます」

フォルベルクはこの部屋から出て、通信室という管理局と連絡を取る部屋に向かうのだった。

通信室に着くと、目の前に大きな画面があり、その下辺りにはパソコンなどを使うキーボードが置いてあった。

彼はそこに座ると、電源を付けて、どこかに連絡を始め、画面に誰かが映る。

『そちらから連絡が来るとは、何かあったのか？　フォルベルク研究長』

画面に映し出された男性は管理局の制服を着ており、一佐以上の階級を感じだった。外見から見れば指揮官のような感じで、管理局

の人間だという感じであった。

フォルベルクは画面に映っている男性に敬意を払いながら話し始める。

「はい、リュベル一等陸佐。ようやく吉報をそちらに報告出来るようになりまして」

「っということは何か進展があったのか？」

リュベル一等陸佐と呼ばれた男性は報告をしてくるという事ぐらだから何かあったのだらうと推測し、そう思ってフォルベルク研究長に聞く。

「はい。まだ一人目ですが、今回は成功する可能性が高いかと」

「なるほど。だが、今度からそういう事は成功してから報告しろ」

「すみません。少しテンションが上がってまして。何度も失敗して初めて成功しそうな可能性が出来ましたから」

「まあ、それは分からなくはない。とりあえず、成功したらまた報告を頼む」

「了解し」

フォルベルクが『了解しました』と言おうとしたのだが、最後まで言えなかった。

理由はこの通信室にあった電話が鳴り始めたのだ。

研究内に連絡するためにあるものであり、何か連絡があるときに電話が鳴るものだった

「すみません。もう一件話しがあったのですが、少し待ってください」

「分かった。それと、電話の内容は私にも聞こえるようにしてくれないか？ 少し胸騒ぎがしているのでな」

「は、はあ。別にかまいませんが」

フォルベルクは画面に映ってるリュベルに声が聞こえるようにし、受話器を手に取るのだった。

「一体どうしたんだ？」

『ふお、フォルベルク研究長！！ 少し異変が起こりまして』  
「異変？」

電話してきたのは、先ほどフォルベルクが実験を任せた研究員であり、少し慌てている様な感じだった。

フォルベルクとその電話の内容を聞いていたリュベルは研究員の言葉を聞いて眉を細めていた。

『はい、フォルベルク研究長が出て行った後、すぐに二つ波がずつと重なるようになりました』

「別に異変ではないのでは？ 逆に同調しているという事だろ？  
その何が問題なのか？」

どこにも問題ないし、研究員の言葉を聞いている限り、成功に近づいているようにしか思えなかった。それは電話を聞いていたリュベルもフォルベルクと同じ事を思うのだった。

けど、研究員の言葉は何故か少し慌ただしく感じ、次の言葉を聞くまで何故慌ただしいのか分からなかった。

『それが……先ほどよりも波の速さがかなり早いです。波は重なっているのですが』

「……早いだと？」

フォルベルクは耳を疑うかのように聞き返していた。

「研究員から聞いた言葉が本当なら大変な事ではないかという言い草であった。」

『ええ、私は一年前からこちらに来ましたが、これは一体どういう事』

「今すぐ作業を中止しろ！！ 早く止めないと大変な事になる！！」  
『は、はい！！』

研究員はフォルベルクの怒鳴り声に驚き、少し怯えるような返事で返した。

フォルベルクは研究員の話聞いて、焦っていた。前にも二度も同じことがあったからだ。

一度目はこの実験が始まって数日した時だった。その時は二つの波が重なったりという事はなかったのだが、その時ポットに入っていた人間のリンカーコアの波が突然早くなったのだ。

そしてそれが起こって数分後、ポットに入っていたその人間は暴走を始め、暴れ始めたのだ。すぐに対応して毒ガスで殺して事なきを得たのだが、その後ももう一度発生したのだ。

原因は未だに分からないのだが、今回も同じことが起こっていたのだ。

けどフォルベルクは今回に限っては一つだけ違っていることに気づいた。何故かSSランクの人間のリンカーコアのデータである筈なのに、データまでもがポットに入っている人間のリンカーコアの波と同じ速さのスピードで波が動いていたのだ。

今回に限っては何が起こるか分からない。だからこそ、一度停止させた方が良いと思ったのだ。

しかし、

『だ、駄目です！！ 何故か停止しません！！』

「な、なんだと！？ 一体どういう事だ！！！」

予想外の事態だった。この現象が起こった二回目の時は停止できたので、今回も停止出来ると思っていただけだが、今回はそれすらもできなかったのだ。

だからフォルベルクもその事態に慌てており、研究員にどういう事なのか聞いたのだ。

『それが、何故かハッキングされているようなのです!!』

「ハッキングだと!? ハッキングしたときは侵入者がすぐ分かるようにしてある筈だ!!」

『はい、その通りの筈です。けど、先ほど確認したのですが、外から侵入した形跡がないのです!!』

「……なんだと」

この研究所はハッキングされた状態ですぐにハッキングした人間を探り当てるように機能されており、絶対にハッキングできないようにされているのだ。

けど、そんな形跡はないというのだ。それはどういう事を指すのか。

一番考えられるのは内部からのハッキングだ。しかしそれをする理由はこの場所に居る人間に利害はない。そんな事をした時点で犯人だとすぐにばれて殺されるだけだからだ。スパイが侵入してハッキングをしたと考えられるかもしれないが、この場所に侵入している時点でそんな事をする意味がないし、自殺行為に等しい。だから内部からのハッキングはありえないのだ。

結局何故ハッキングしたか分からない状態であるが、フォルベルクは冷静に考えてるのだった。

「（外からのハッキングされた感じではないし、内部からというのはありえない。それに、波が早くなってからハッキングされたとい

うのは……偶然なのか？ いや、もしかすると」

『フォルベルク研究長、一体どうすれば良いですか？ まだ私はここにきて一年しか経っていないので、こういう事態には慣れてないのですが』

「とりあえず、暴走した時の為に毒ガスを出す準備をしておけ。私もすぐにそつちに戻る」

『了解』

研究員がそう言うと、通話が切れてフォルベルクも受話器を電話に戻した。

そして画面の方に顔を戻し、リュベルと話し始める。

「すみません、緊急事態が起こってしまって」

『まあ、仕方ないだろ。とりあえず終止符が着いたら一度連絡を頼む』

「分かりました。それでは私は少し急ぎますので」

フォルベルクは画面を切り、急いで通信室から出て先ほどいた部屋に戻るのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2720p/>

---

魔法戦記リリカルなのはmemories ~ 幼馴染と聖王の末裔 ~

2011年12月12日00時46分発行